

16 一九世紀アメリカ合衆国におけるへ

ルス・リフオーム——菜食主義の社会的・

文化的地平

鈴木 七美

近代化が急速に進行しつつあった一九世紀アメリカ合衆国では、医療に関しても多様な議論が活発に行われていた。なかでも一連のヘルス・リフオーム運動は、アメリカ医学社会史の特徴のひとつとして近年精力的に研究が蓄積されてきた分野である。

本報告では、これらヘルス・リフオーム運動において重要な位置を占めていた菜食主義（ヴェジタリアニズム）による食養生の勧めが、同時代の社会的・文化的問題意識といかに関連しあい、どのような人間を構想していたのかについて検討したい。

一八世紀末以降、アメリカ合衆国では医師の育成や医療の整備が急務とされ、医学校を卒業した「正規の医

者」が登場した。だが広大な大地を開拓してきた人々のあいだでは医療における「セルフ・ヘルプ」の伝統が根強く、「正規の医者」のみが医療を担うという新しい文化に関し激しい議論が巻き起こった。なかでもアメリカに自生する薬草の効用を訴えた「植物治療運動」、水を用いる食養生とエクササイズを提唱した「水治療運動」、そして薬物の適用や種類に関し独自の理論を展開した「ホメオパシー（同毒療法）」など多様な代替医療の試みが提起されるにいたった。

それら代替医療においてとくに議論されたのは、医療者が身体の自然の力をどの程度信頼しどの程度介入するかという点である。代替医療を推進する人々は、病いの道行きについて、症状はすべて回復に向かう身体の自然の闘いであり、瀉血や下剤を頻繁に用いて介入する当時のアメリカ医療の傾向を批判していた。これらは同時代の「正規の医者」にも共有されていたことではあったが、医療における急激な変化に伴い、再考すべき根本的問題として浮上したのである。

代替医療運動のいまひとつの特徴は、彼らが理想とす

る「健康」な人間の状態に關しはしばしば発言していた点である。「健康」な人間像は、近代化過程で蝕まれていく身体の自然の力を取り戻すのみならず、激動する時代を生き抜く新たな「第二の自然」を身につけた人間として構想された。それは、都市化・産業化のもとで生きる人々がかつての「自然」の力を取り戻すことはもはやできないであろうという諦念に基づくものである。新しい生活様式のもとで人々がしばしば「神経病」に脅かされているという憂慮も表明された。

心身の衰弱に苦しむ人々に対する処方箋を提示するにあたって、自分たちとは異なつた生活を送る人々が熱心に観察された。アメリカ先住民、気候や経済において厳しい状況にあるヨーロッパ大陸諸国の人々などの暮らしが参照された。都市で核家族として生活を営む人々の「家族の問題」も指摘された。そうした分析の結果、不可分に結びつく心身においてとりわけ神経を健康にすることが肝要であると主張された。神経は、動物食や当時流行した漂白された「白パン」に代表される豊かな食生活によつても弱体化するとされ、菜食主義を中心とした

食養生が提唱された。

「正規の医療」台頭をきっかけとして提起されたヘルス・リフォームの波は、身体から全体としての人々のあり方や社会を見渡す視野をもつことを促し、菜食主義を通して教育や宗教の分野とも密接に結びついていたのである。

(京都文教大学)